

簿記・会計 解説

第1問

A．個人企業である愛知商店（決算は年1回、決算日は12月31日）は当座預金の取引を当座勘定のみで処理しており、取引銀行との間に500千円を限度とする当座借越し契約を結んでいる。

問1

4月2日の取引について考える。資料2の記録内容より、この日の取引の仕訳は以下の通りになる。

4/2 現金 100 受取手数料 100

[ア]の解答群の中で現金勘定に記入されるものは0。郵便為替証書のみである。

問2

空欄[イ]が置かれている4月6日の取引について考える。3月30日に納税通知書にしたがい、固定資産税を負債として計上した取引の仕訳は以下の通り。

3/30 租税公課 ** 未払税金 **

（固定資産税以外の租税公課も負債として計上していることもあるため金額は不明）この後4月6日に、固定資産税の第1期分¥30を現金で納付した際の仕訳は以下の通りになる。

4/6 未払税金 30 現金 30

以上から[イ]に入る勘定科目は3.未払税金である。

4月13日から27日の取引の仕訳は以下の通りになる。

4/13 通信費 20 現金 100
租税公課 80

4/15 商品 300 買掛金 300

4/19 当座 310 商品 ()
商品売買益 ()

4/27 備品 320 当座 170
未払金 130
現金 20

問3

上の仕訳より

[ウ] = a . 未払金

[エ] = 0 . 通信費

[オ] = 5 . 租税公課

問4

資料2の¥[カキ]0は27日に支払われた備品の金額にあたる。27日にはパソコンの金額¥300に加えてすえつけ費用¥20も支払われているため、¥320が記入される。

また¥[クケ]0は19日の取引により得られた商品売買益にあたる。商品の勘定元帳から、この日に売られた商品の原価が¥200であることが分かる。

以上から記入される商品売買益は $¥310 - ¥200 = ¥110$ である。

問5

30日の取引を当座勘定を用いる仕訳を行うと次の通りになる。

4/30 買掛金 () 当座 ()

一方、当座勘定を用いない処理による仕訳で貸方の勘定科目が2個に分かれている。このことから、この取引で当座借越がされたことが分かる。当座の勘定元帳から30日の買掛金の金額を求めると

$$50 + 310 - 170 = 190$$

となる。このことから貸方の1行目に「当座預金 190」が記入され、2行目の勘定科目は0.当座借越である。仕訳を記入すると

4/30	買掛金	250	当座預金	190
			当座借越	60

となる。

簿記・会計 解説

第1問

B.

(1) 株式の払込額のうち資本金として計上しないことが認められている最高限度額は払込額の(2)分の1である。

300株を1株につき¥1で発行したため払込額は¥300。資本金として計上しなくてもよい最高限度額は¥150となる。この払込額は資本準備金とするため仕訳は以下の通りになる。

当座預金	300	資本金	150
		資本準備金	(150)

空欄の[セ][ソ]には順に0.150、5.資本準備金が入る。

(2) 1.繰延資産は創立費や開業費のように、次期以降にも効果が及ぶ支出のことで、支出した年度だけの費用としないで、資産として繰り延べ次期以降の費用とすることができる。

前払費用は保険料、家賃、利息など当期支払った費用のうち次期以降の費用のものを指す。

(3) 3.資本取引と損益取引区分の原則とは資本の増減を利益・費用取引として計上することを認めず、取引を区別して計上しなければいけない、という原則である。特に資本剰余金と利益剰余金に対して適用される原則である。

問題の例では株式払込剰余金(資本)の一部を株式交付費(費用)に当てられるため、資本取引と損益取引区分の原則に反する。原則に反する仕訳と原則に沿った仕訳は以下のとおりになる。

原則に反する仕訳の例

株式交付費	***	株式払込剰余金	***
-------	-----	---------	-----

原則に沿った仕訳の例

当座預金	***	株式払込剰余金	***
株式交付費	***	当座預金	***

(4) 社債を発行し、受け取った払込金は将来支払わなければならない。このため社債勘定は負債にあたる。

よって社債を発行したときは社債勘定の(貸)方に記入し、取引要素は2.負債の増加になる。

以下の社債を発行することを考える。

発行日	:	×5年4月1日(決算日3月31日)
額面総額	:	¥400
払込金額	:	@¥97(単位:円)
利率	:	年3%
利払い	:	3月末日、9月末日の年2回
償還期限	:	3年

全額の払い込みを受けたとき、社債¥100あたり¥97で払い込みを行うため、払い込み

の金額は

$$¥400 \times \frac{¥97}{¥100} = ¥388$$

この金額が社債勘定に記入される。

(5) 社債を償還期日前に購入して償還する方法は 4. 買入償還 と呼ばれる。このとき社債は証券市場から市場価額で購入するため帳簿価額との差額が生じることがある。

帳簿価額が買入価額より大きいときには、株式会社に利益が生じる。この利益は 7. 社債償還益勘定に記入する。

(6) 北海道商事株式会社は株主総会で繰越利益剰余金から配当金 ¥120 を支払うことを決議した。

このときの仕訳では借方は繰越利益剰余金である。一方貸方については配当金の支払いを決議しただけで実際の支払は行われていないため 2. 未払配当金 勘定に記入する。

これに伴い利益準備金の計上を行う。配当する日の資本金勘定、資本準備金勘定、利益準備金勘定の残高は次のとおりである。

資本金 ¥1,200 資本準備金 ¥200 利益準備金 ¥90

会社法の規定により計上しなければならない利益準備金の金額は以下の2つの金額の少ない額になる。

1. 配当金の10分の1
2. 資本金の4分の1 - 資本準備金 - 利益準備金

それぞれの金額を求めると

1. $¥120 \times 1/10 = ¥12$
2. $¥1200 \times 1/4 - ¥200 - ¥90 = ¥10$

よって利益準備金に計上する金額は ¥10 である。

簿記・会計 解説

第2問

まず資料1の取引の仕訳を行う。金額は後ほど記入を行う。

日付	借方	貸方
2日	仕入	受取手形
4日	受取手形 売掛金 発送費	売上 現金
7日	仕入	支払手形 現金
9日	売上	売掛金
11日	受取手形 売掛金	売上
12日	仕入	受取手形 買掛金
13日	買掛金	仕入
15日	当座預金	仮受金
17日	仮受金 試用仮売上	売上 試用品
19日	前払金	当座預金
21日	未着商品	前払金 買掛金
22日	仕入 売掛金	未着商品 売上
24日	積送品	仕入 現金
30日	仕入 売掛金	積送品 売上

問1

上の仕訳と勘定元帳の記入内容より

- [ア]: 4日の現金に対する勘定科目であるため、c. 発送費 が入る。
- [イ]: 15日の取引より a. 仮受金 が入る。
- [ウ]: 19日の取引より 3. 前払金 が入る。
- [エ]: 2日の取引より 0. 受取手形 が入る。
- [オ]: 22日の仕入に対する勘定科目であるため、2. 未着商品 が入る。

問2

資料2、資料3より、取引の金額を記入すると以下の通りになる。

2日	仕入	240	受取手形	240	(仕入勘定元帳、商品有高帳)
4日	受取手形	150	売上	270	(売上勘定元帳、受取手形記入帳)
	売掛金	[テトナ]			
	発送費	15	現金	15	(現金勘定元帳)
7日	仕入	[クケコ]	支払手形	450	(現金勘定元帳、支払手形記入帳)
			現金	30	
9日	売上	[カキ]	売掛金	20	(三重商店の得意先元帳)
11日	受取手形	480	売上	810	(売上勘定元帳、 京都商店の得意先元帳)
	売掛金	330			
12日	仕入	140	受取手形	[ニヌ]	(商品有高帳、 兵庫商店の仕入先元帳)
			買掛金	50	
13日	買掛金	10	仕入	10	(兵庫商店の仕入先元帳)
15日	当座預金	125	仮受金	125	(当座預金勘定元帳)
17日	仮受金	125	売上	125	(売上勘定元帳)
	試用仮売上	125	試用品	125	(17日の取引内容)
19日	前払金	100	当座預金	100	(当座預金勘定元帳)
21日	未着商品	300	前払金	100	(19日、22日の取引内容)
			買掛金	200	
22日	仕入	300	未着商品	300	(仕入勘定元帳、売上勘定元帳)
	売掛金	375	売上	375	
24日	積送品	525	仕入	500	(現金勘定元帳、仕入勘定元帳)
			現金	25	
30日	仕入	[サシス]	積送品	525	(24日の取引内容、売上勘定元帳)
	売掛金	640	売上	640	

・21日の取引について

22日の仕入勘定元帳からB商品の仕入=未着商品の金額が¥300であることが分かる。B商品については19日に前払金¥100を支払っているため、残りの金額¥200が21日に呈示された荷付為替手形の金額となる。

以上の仕訳より

$$\begin{aligned} [\text{カキ}] &= 20 \\ [\text{クケコ}] &= 450 + 30 = 480 \\ [\text{サシス}] &= 525 \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} [\text{テトナ}] &= 270 - 150 = 120 \\ [\text{ニヌ}] &= 140 - 50 = 90 \end{aligned}$$

次に商品有高帳の空欄を埋めていく。単価は移動平均法で求めていく。

1日：前月繰越分は数量10個、単価¥15より金額は¥150

2日：数量20個、単価¥12金額¥240の商品を仕入れた。このため

$$\text{残高数量} : 10 + 20 = 30 \text{ 個、残高金額} : ¥150 + ¥240 = ¥390$$

となるため単価は $¥390/30 = ¥13$.

4日：数量15個を販売したため、払出の金額 [セソタ] は

$$15 \times ¥13 = ¥195.$$

残高は数量15個、単価¥13、金額¥195.

7日：仕訳より仕入の金額は¥480. 数量は30個であるため、単価は $¥480/30 = ¥16$.

残高数量：15 + 30 = 45 個、残高金額：¥195 + ¥480 = ¥675

となるため単価は $¥675/45 = ¥15$.

11日：残高分すべての商品を払い出している。数量 45 個、単価 ¥15、金額 ¥675 残高はすべて 0 である。

12日：数量 10 個、単価 ¥14 金額 ¥140 の商品を仕入れた。残高はこれらの数値である。

13日：12日に仕入れた商品から ¥10 の値引きを行っている。これらは残高の金額から値引きが行われるため、

残高金額：¥140 - ¥10 = ¥130

残高の数量は変わらず 10 個であるため、残高の単価 [チツ] は

$¥130/10 = ¥13$.

問 3

受取手形記入帳で [ネ] が記入されている項目は「() 人または裏書人」となっている。このため、() 人は裏書人と同じ立場である (振出) が入る。

6月2日の取引の内容から [ネ] には振出人の 1 . 京都商店 が入る。

問 4

前月に試用品を発送したため、このときの仕訳は

借方：試用品 貸方：試用仮売上

となる。

また、17日の取引で発送商品のうち半分だけ買い取ることになり、売り上げに ¥125 が記入されている。つまり発送した金額は $¥125 \times 2 = ¥250$ であることが分かる。以上から正しい仕訳は

1 . (借) 試用品 250 (貸) 試用仮売上 250

である。

簿記・会計 解説

第3問

問1

資料2の決算整理事項等の仕訳を行う。

(1) 掛けによる売上に対する値引きであるため、

売上 50 売掛金 50

(2) 資料1より現金過不足は¥8。このうち買掛金の誤記帳による金額を引き、残りが雑益となった。資料3より雑益は¥3。であるため、

現金過不足 8 買掛金 5
雑益 3

(3)

仕入 240 繰越商品 240
繰越商品 270 仕入 270

(4) 資料1と(1)の内容より、売掛金の期末残高は

$$1,110 - 760 - 50 = ¥300$$

よって貸倒引当金は $300 \times 2/100 = ¥6$ 。資料1より貸倒引当金の残高は $5 - 3 = ¥2$ 。であるため、繰入額は $6 - 2 = ¥4$ 。

貸倒償却 4 貸倒引当金 4

(5) 備品は×4年1月1日に取得し、2年経過しているため1年分の減価償却が行われ、さらに1年分の減価償却を行う。1年分の減価償却費は

$$\left(320 - 320 \times \frac{10}{100} \right) \times \frac{1}{4} = ¥72$$

よって仕訳は以下の通りになる。

減価償却費 72 備品減価償却 72
累計額

(6) 資料1より有価証券の残高は $260 - 100 = ¥160$ 決算日の時価は¥165 になっているため、

有価証券 5 有価証券評価益 5

(7) 毎年1月末日に2月～翌年1月分の保険料を前払している。このため、決算日(12/31)には翌年1月分の前払保険料として繰延を行い、その後当期に入ると保険料に振り戻す。以上から決算整理前までに行われた仕訳は以下のとおりである。

1/1 保険料 1か月分 前払保険料 1か月分
1/31 保険料 12か月分 * * * 12か月分

このことから資料1の保険料の金額は13か月分であることが分かる。よって1か月分の保険料は $26/13 = ¥2$ 。以上から決算整理の仕訳は

前払保険料 2 保険料 2

(8)

消耗品 3 消耗品費 3

(9) 借入金の1年間の利息は

$$200 \times \frac{4}{100} = \text{¥}8$$

前回の利払い日9月末日から、期末の12月末日まで10月～12月の3か月分の利息をまだ支払っていない。この利息を未払利息として繰越を行う。繰越の金額は

$$8 \times \frac{3}{12} = \text{¥}2$$

よって仕訳は

支払利息 2 未払利息 2

(10)

資本金 12 引出金 12

以上の仕訳から資料3の未記入項目を記入を行う。

仕入 [アイウ] の正解

$$1070 - 80 + 240 - 270 = \text{¥}960.$$

貸倒償却 [エ] の正解

$$\text{¥}4$$

減価償却費

$$\text{¥}72$$

保険料 [オカ] の正解

$$26 - 2 = \text{¥}24$$

消耗品費

$$21 - 3 = \text{¥}18$$

支払利息 [キ] の正解

$$\text{¥}2$$

売上 1, [クケコ] の正解

$$1480 - 60 - 50 = \text{¥}1,370$$

有価証券評価益 [サ] の正解

$$\text{¥}5$$

以上から損益勘定の内容をまとめる。

		損益		
12/31	仕入	960	12/31 売上	1,370
	給料	227	有価証券売却益	7
	貸倒償却	4	有価証券評価益	5
	減価償却費	72	雑益	3
	旅費	27		
	保険料	24		
	消耗品費	18		
	支払家賃	36		
	支払利息	2		
	当期純利益	15		
		1,385		1,385

資産、負債、資本の残高を求める。

資産：

現金	:	¥120 = 565 - 445
当座預金	:	¥530 = 1,780 - 1,250
売掛金	:	¥300 = 1,110 - 760 - 50
有価証券	:	¥165 = 260 - 100 + 5
繰越商品	:	¥270 = 240 - 240 + 270
消耗品	:	¥3 = 4 - 4 + 3
備品	:	¥320
前払保険料	:	¥2
資産合計	:	¥1,710

負債：

買掛金	:	¥255 = 860 - 610 + 5
借入金	:	¥200
貸倒引当金	:	¥6 = 5 - 3 + 4
備品減価償却	:	¥144 = 72 × 2
累計額		
未払利息	:	¥2
負債合計	:	¥607

資本：

資本金	:	¥1,088 = 1,100 - 12
資本合計	:	¥1,088

貸借対照表は以下の通り

貸借対照表

現金	120	買掛金	255
当座預金	530	借入金	200
売掛金	300	貸倒引当金	6
有価証券	165	備品減価償却	144
		累計額	
繰越商品	270	未払利息	2
備品	320	資本金	1,088
消耗品	3	当期純利益	15
前払保険料	2		
	1,710		1,710

問 2

1月の取引の仕訳を行う。

1日	支払家賃 引出金	3 1	当座預金	4	(当座預金出納帳)
	未収金	37	備品	80	(普通仕訳帳)
	累計額	()			
	売却損	()			

備品 ¥320 のうち ¥80 を売却したため減価償却費は

$$¥144 \times \frac{80}{320} = ¥36$$

よって減価償却累計額は ¥36、固定資産売却損は ¥80 - ¥37 - ¥36 = ¥7.

3日	現金	15	売掛金	15	(現金出納帳)
	買掛金	15	当座預金	15	(当座預金出納帳)
4日	買掛金	9	現金	9	(現金出納帳)
5日	当座預金	16	売掛金	16	(当座預金出納帳)
9日	仕入	()	買掛金	40	(仕入帳)
			当座預金	10	(当座預金出納帳)

当座預金出納帳と仕入帳の記入から 9日の仕入の金額は ¥50.

10日	買掛金	10	仕入	10	(仕入帳)
	売掛金	60	売上	()	(売上帳)
	現金	10			(現金出納帳)

現金出納帳と売上帳の記入から 10日の売上の金額は ¥70.

11日	売上	5	売掛金	5	(売上帳)
12日	仮払金	4	現金	4	(現金出納帳)
14日	仕入	30	買掛金	30	(仕入帳)
	現金	1	仮払金	()	(現金出納帳)
	旅費	()			(普通仕訳帳)

現金出納帳と普通仕訳帳の記入から 14日の仮払金は ¥4、旅費は 4 - 1 = ¥3 となる (12日に仮払した ¥4のうち、¥3は旅費として使い、残りを返還した)

15日	当座預金	20	売上	20	(売上帳、当座預金出納帳)
19日	当座預金	10	売掛金	10	(当座預金出納帳)
21日	仕入	15	現金	15	(仕入帳、現金出納帳)
	貸倒引当金	1	売掛金	1	(普通仕訳帳)
23日	売掛金	40	売上	40	(売上帳)
25日	給料	23	所得税預り金	2	(普通仕訳帳、合計試算表)
			当座預金	()	(当座預金出納帳)

25日の取引からこの日の当座預金の金額は $23 - 2 = ¥21$ である。

28日	消耗品費	6	現金	6	(現金出納帳)
30日	現金	37	未収金	37	(現金出納帳)
31日	保険料	24	当座預金	24	(当座預金出納帳)

以上の取引を勘定元帳に記入する。

現金					
1	前月繰越	120	4	買掛金	9
3	売掛金	15	12	仮払金	4
10	売上	10	21	仕入	15
14	仮払金	1	28	消耗品費	6
30	未収金	37	31	次月繰越	149
		183			183

よって [シス] = 49. また 25日の取引より [セソ] = 21.

仕入					
9	諸口	150	10	買掛金	10
14	買掛金	30			
21	現金	15			
		95			10

よって [タチ] = 95. また 13日の取引より [ツ] = 3.

消耗品費					
1	消耗品	3			
28	現金	6			
		9			

よって [テ] = 9. また 1日の取引より [ト] = 7.

売掛金					
1	前期繰越	300	3	現金	15
10	売上	60	5	当座預金	16
23	売上	40	11	売上	5
			19	当座預金	10
			21	貸倒引当金	1
			31	次期繰越	353
		400			400

よって [ナニ] = $15 + 16 + 5 + 10 + 1 = 47$.

買掛金

3	当座預金	15	1	前期繰越	255
4	現金	9	9	仕入	40
10	仕入	10	14	仕入	30
31	次期繰越	291			
					1,103

よって [ヌネノ] = $255 + 40 + 30 = 325$.

資本金

			1	前期繰越	1,088
			1	純利益	15
					1,103

よって [ハヒフ] = 103.